

はじめに

二〇〇七年八月から二〇一〇年九月までの三年あまりの間、私はコロンビアの日本国大使館で勤務する機会を得た。

二〇〇七年の五月頃、在コロンビア日本国大使のポストの打診をいただいたとき、正直に言って私自身コロンビアに対して良い印象を持っていなかったため、それを受けるべきかどうかについて相当迷い、数人の先輩や友人に相談してみた。その反応は、異口同音に「いまさらそんな治安の悪い危険な国へ行つて苦労することはないのではないか」という消極的なものだった。

要するに、一般の人がコロンビアと聞いて最初に思い浮かべる最大公約数的イメージは、治安が悪く、危険な国というものだ。私も二〇〇〇年にコロンビアに一日だけ立ち寄った際、大使館の書記官から、ホテルから絶対に外に出ないようにという注意を受けたことがあり、治安の悪さは身をもって体験していた。

このような身辺状況のなかで、大使就任を受けるにせよ断るにせよ、一応コロンビアの歴史、政治、経済、社会、文化などを勉強して判断したいと思ひ、早速都内の大きな書店にコロンビアに関する概説的な本を探しに出かけた。しかし、コロンビアに関する一般的知識を紹介する書物は全く見当たらず、コロンビアに対する我が国の関心の薄さと情報の欠如を実感させられた。コロンビアに関連する本として見つけたのは、二〇〇二年の大統領選挙における大統領候補で、当時コロンビア最大の左翼武装ゲリラ組織であるFARC（コロンビア革命軍）に誘拐されていたイングリッド・ベタンクールが、大統領選挙の出馬キャンペーンのために自分の政治活動について書いた『それでも私は腐敗と闘う』（永田千奈訳、草思社）、二〇〇三年にジャーナリストの伊高浩昭が著した『コロンビア内戦―ゲリラと麻薬と殺戮と』（論創社）、およびガイ・グリオッタとジェフ・リーン共著の『キングズ・オブ・コカイン―コロンビア・メデジン・カルテルの全貌』（藤井留美訳、草思社）の三冊のみだった。店員に、コロンビア全体を知ることができるような本はないのかと質問したところ、財団法人世界経済情報サービスが出版しているARCRレポート『コロンビア』があると教えられた。その本の定価は一万四七〇〇円と相当高価であったが、その分網羅的で充実した内容であろうと期待してその場で取り寄せを依頼した。しかし、一週間

後に入手できたこの本を見て全く失望してしまった。なんと全体で一二〇頁程度の薄い本で、政治情勢についてはわずか一〇数頁、経済情勢などについても主としてコロンビア中央銀行の統計を日本語に翻訳してそれに若干の解説を加え、世界銀行や国際機関の資料が掲載されているにすぎないものであった。

A R C レポートは、政治動向の概況のなかで「これら二大政党（筆者注、保守党と自由党）が成立してから約半世紀の間に全国規模の内乱が九回数えられ、なかでも一八九九年（一九〇二年の内乱は「千日戦争」と呼ばれている。これらの内乱は、主として与党に対する野党の反乱であるが、同一党内の争いでもあった。選挙運動はしばしば暴力事件をと、も、な、い、政府与党は野党の候補者の参加をしばしば妨害した。一九世紀のコロンビアでは選挙運動と暴力に区別がなかった。千日戦争では、一〇万人の死者（当時の人口に対して二%以上）と経済的破綻をもたらしたばかりでなく、政治的混乱のなかでパナマ運河の建設を目論む米国の介入を招き、当時はコロンビアの一州であったパナマの独立を許すこととなった。さらに、この戦争は、党勢力強化のための手段として暴力を行使するというコロンビアの性格を決定的にする重要な契機となった。」（傍点は筆者、五頁）と記述している。また、伊高浩昭の『コロンビア内戦』は、コロンビアの独立（一八一〇年）以来現在まで、

国内において生じた市民戦争 (guerra civil、以下「内戦」と呼ぶ)、反乱、暴動、一般犯罪などの総称として、または政治的暴動のみを指すものとして用いられる。ビオレンシア (英語のバイオレンスに相当するスペイン語) について説明した部分で、「コロンビアの悩みは、植民地時代からつづいてきた地方分立の伝統が根強く残り、(中略) このため連邦制か中央集権制か、という統治理念をめぐる抗争が長らくつづくことになる」(四二頁)、また、「ビオレンシア (政治的暴力) はロハス (筆者注、一九五三年～一九五七年の軍事政権時代の大統領) の強権をもって、ようやく下火となったが、ボゴタソ (筆者注、一九四八年四月九日、大統領候補であった自由党のホルヘ・エリエセル・ガイタンがボゴタ市内で暗殺されたのを契機として、ボゴタ市内で発生した騒動のこと。なお、この騒動はその後全国に波及して、史上最悪の死者を出し、これをラ・ビオレンシアと呼ぶ) 以降一〇年間に、全国で最大二〇万人が犠牲になったと推定される。だがビオレンシアは〈癌〉となってコロンビア全土に転移し、不治のまま、^{まがまが} 同国は二一世紀にもつれ込むのである。」(傍点は筆者、五〇頁) と記述している。

何と禍々しくかつ暴力的なコロンビアの政治史の性格づけであることか。しかも、両書とも暴力ないしビオレンシアがコロンビアという国の性格であり、二一世紀の今日まで継続しているとの印象を与えている。コロンビアと聞いて誰もが最初に思い浮かべるイメー

ジは、治安が悪く、危険な国という固定観念であるが、これらの本からこういうコロンビア像が定着するのは、ごく自然の帰結といえよう。

話は前後するが、二〇〇九年末に、これと同じようなコロンビアに関する偏った情報を目にした。それは、二〇〇九年の秋頃、日本の友人から送られてきた『ママンへの手紙』（三好信子訳・解説、新曜社）という出版されたばかりの本の内容についてである。これは、前述のF A R Cに誘拐されていたイングリッド・ベタンクールがジャングルから母親に宛てて書いた手紙の翻訳本である。この手紙は、フランスとコロンビアの二重国籍を持つイングリッドの解放をフランス政府が働きかけて、ベネズエラのチャベス大統領の仲介により、F A R Cが彼女の生存を示す証拠として書かせたものである。二〇〇七年一月二九日、コロンビアの軍と警察がボゴタ市内でF A R Cのシンパ三人を逮捕したところ、イングリッドをはじめ米国人三人（二〇〇三年二月拉致）、ルイス・エラディオ・ペレス元上院議員（二〇〇一年六月誘拐）、政府軍・警察の要員（多くが一九九八年以降拘束）など計一七人の生存証拠となるビデオ（二〇月二三日および二四日の日付）、写真、および本人たちが書いた手紙が発見、押収され、翌三〇日に新聞・テレビで資料として公表された。

訳者の三好信子は、パリ在住で、日仏女性資料センターに所属しているが、イングリッ

ド・ベタンクルの救出運動に賛同し活躍するなかで、コロンビアの政治社会に関心を持ってこの本を出版したという。そして、この本の前半部分でコロンビアの歴史を解説し、「一九四六年に始まって一九五九年まで続いたこの暴力の時代を「ビオレンシア」と呼ぶ。一〇年間に一八万人が死んだ。土地を中心とするこの流血の利権闘争は、二党間の争いという形をとったが、事実は地方の農民と地主階級との戦いだった。・・・略」とゲリラ組織のひとつELN（コロンビア民族解放軍）情報部は語っている。（中略）ガレアノはこの激しい農民戦争の暴力を、^{ビオレンシア}「長い間反芻されてきた農民の憎しみが爆発し、一方、政府は警察官と兵士を送って、〈種を絶やせ〉という指令のもと、男の辜丸を切り取り、妊娠した女の腹を裂いてはなかの赤ん坊を投げ上げて銃剣の先で受け止めた」と語っている。（傍点は筆者、三七頁）とこれまたゲリラ側の見解を基に、ビオレンシアの残虐ぶりを記述している。

一方、このような暴力的なコロンビアのイメージにもかかわらず、コロンビアでの勤務経験のある人の話を伺ってみると、治安が最も悪かった一九九〇年代に生活していた人も含め例外なく、とてもいい国でしたという好印象を語っていただいた。

このコロンビアに関する相矛盾する見方があることを認識しつつもコロンビア勤務を決

意したのは、私のためにご尽力いただいた方々への配慮と、我が国の在外公館のなかで最も治安に関して脅威度が高いにもかかわらず、生活したことのある人が口を揃えて「いい国」という印象を持っているコロンビアという国を自分の目で実際に見てみたいという私自身の好奇心の強さによるものだった。

コロンビアに赴任して各界のコロンビア人とおつき合いをし、政治、経済、社会、文化に触れ、歴史を勉強していくにつれ、日本で想像もしなかったコロンビアの特徴が見えてきた。

第一は、二〇世紀後半から現在までのラ・ビオレンシア、ゲリラとの戦争および麻薬密売組織との戦いによりとくに治安の悪かった時期においても、コロンビア経済はラテンアメリカ諸国のなかで最も安定した成長（平均五％程度）を実現してきたことである。一般に国内に武力紛争を抱えている国の経済成長率は、極めて低いかマイナスになっていることが多く、直近の五〇年をとって経済成長率の成果の悪い一〇カ国をとると七カ国で国内における武力紛争が起きている。しかしコロンビアにおいては、国内の武力紛争があっても経済は安定しているため、多くの研究者が「コロンビアの謎」と称している。

このような安定した経済運営の結果、ラテンアメリカ諸国で起きた一九八〇年代前半お

よび一九九〇年代後半のハイパーインフレーションや債務危機・通貨危機をコロンビアは経験していない。また、この時期に、社会の混乱を收拾するための軍部によるクーデターも起こっていない。

第二は、コロンビア社会はラテンアメリカ諸国のなかでも貧富の格差が大きく、コロンビア政府が定めている「基礎的な生活水準」を維持できない世帯の割合として定義される貧困割合が四六%と高いにもかかわらず、現在の生活に満足している人々の割合が九三・三%と世界で最も満足度の高い国のひとつとなっていることである。この数字は、現在治安状況が改善した効果なども入っていると考えられるので、満足度の数字の解釈には注意を要するが、前に引用した本が記述するような「不治の病の（癌）」としてのビオレンシアとは両立しがたいものであるように思う。さらに、コロンビアは二〇世紀を通じてほとんど外国からの移民を受け入れなかった珍しい国であるが、人口がこの間一〇倍強に増加していることは、他のラテンアメリカ諸国と比べて特異な現象である。

第三は、コロンビア人は、一般に温和で優しい性格であり、労働者は勤勉で真面目に仕事に取り組んでおり、さらに信仰心も篤いという印象を受けた。また、産官学の指導的立場にある人々は極めて高い学歴を有し、知的で文化的教養も高く、優れた人物の層の厚さ

を感じた。

このコロンビア人の国民性については、私だけの意見ではなく、コロンビアに勤務している在留邦人も共有していたし、さらにコロンビア駐在の外国大使も概ね同意見であった。なお、コロンビア駐在の外国大使がコロンビアの国民性を高く評価しているひとつの証左として、大使の任期終了後コロンビアに永住する大使が私の在任中六人もいたことが挙げられようか。

このようなコロンビアのラテンアメリカ諸国とは異なる特徴と前に引用したような残虐で暴力的なビオレンシアの歴史と国民性とは、どう考えても両立しないように思われ、この疑問が私の在任中頭を離れることはなかった。

ちょうど二〇一〇年がコロンビア独立二〇〇周年に当たったこともあり、新聞、雑誌などがコロンビアの歴史についての特集を組むことが多く、歴史を勉強するのには大変好都合であった。また、コロンビアの政界、官界、財界、学界の有力者を公邸に招いて情報収集する機会にも恵まれ、この疑問を率直に意見交換することもできた。さらに、ボゴタは南米のアテネと呼ばれるほど大学の数が多く、またコロンビアはラテンアメリカ諸国のかで書物の輸出が第一位で、質の高い文献が十分あるという好環境に恵まれた。

本書は、私の問題意識について、多くの方々から教わったこと、本を読んで発見したこと、議論を通じて私なりの結論に達したことを踏まえ、我が国に不足しているコロンビア関係の情報を補充し、またコロンビアに関して我が国で形成されている誤ったイメージを是正して、コロンビアの真実の姿を紹介することを目的として書いたものである。

その際、第一に意を用いたことは、コロンビアのビオレンシアの歴史を否定しようとするのではなく、その事実をできるだけ客観的に把握し、また個別の要因を国民性といった抽象的概念や階級対立といったイデオロギーに偏ることなく、最近の学問的成果を踏まえて記述することである。また、その個別の要因が現在も存在しているのかどうかを明らかにして、ビオレンシアの影響を評価することである。これによって、現在のコロンビアの犯罪事情についても客観的に評価し、いたずらに恐がったり、また逆に手放して安全になったと楽観視することを避けることができるようになると考ええる。

第二に、最近の犯罪統計による殺人率は下がったとはいえ依然として高止まりしている原因を究明することである。

一九七三年にコロンビアにおける死亡原因の第七位であった殺人が、一九八六年には第一位になり、その後も殺人件数は増加し一九九一年にピークに達している。すなわち、

一九九一年には人口一〇万人当たりの殺人件数は八六人を記録し、世界で最も殺人率の高い国となった。現在（二〇〇九年）、この殺人率は、三五・二人に低下しているが、この水準は中南米諸国と比較すれば概ね中位程度まで改善されたとはいえ、欧米先進諸国の水準の一〇人以下（日本は約一〇人）と比較すれば依然として高いといわざるを得ず、その原因を最近の研究成果を参考に究明することである。

外交団の会合で、当時のベルムードス外務大臣は、コロンビア政府の人権問題に配慮した治安対策を説明しつつ、コロンビアのありのままの現実に関する情報の不足がコロンビアと諸外国との経済関係などの発展の阻害要因となっていると現状を分析して訴えたことがある。日本とコロンビアの二国関係についても、残念ながら経済関係は停滞しているといわざるをえない状況である。その最大の要因は、二〇〇一年に日系企業の日本人の副社長が誘拐され、大変不幸なことに、二〇〇三年に解放の途中で政府軍と遭遇したため、ゲリラ組織が日本人を殺害して逃亡した事件が起きたことにある。この事件を契機に、ほとんどの日本企業が駐在員をマイアミ、パナマ、エクアドル、ベネズエラなど近隣諸国に避難させ、そのためビジネス活動が著しく停滞して、日本はコロンビア市場において投資や通商関係で、欧米諸国および中国、インド、韓国などアジア諸国から随分後れをとる状況

になっている。

本書の副題の『悪魔払い』は、私の問題意識であるビオレンシアについてコロンビアにとり憑いた偽りの固定観念を打ち破るという意味で、オックスフォード大学の客員教授で日刊紙エル・テイエンポのコラムニストであるエドゥアルド・ポサーダ・カルボが『夢に見た国（原名：LA NACIÓN SONADA）』のなかで用いた表現を拝借した。

本書がわずかなりともコロンビアの理解に資することになれば、これに勝る幸せはない。なお、筆者が犯した誤りについて、ご指摘、ご叱正をいただければさいわいである。